

2021年4月

課題本『絵本・ことばのよろこび』

松居 直/著 日本キリスト教団出版局 1995年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

松居 直氏は、「神のことば」を、生きることの基とされるクリスチャンです。

『絵本・ことばのよろこび』は、クリスチャンの彼の思いに貫かれていますから、たくさんの「ことば」が、聖書に裏打ちされた「神のことば」に照らされて、降り注いでいます。

「神のことば」を知らない私でも、この本には共通感覚とも言える場面がいくつもありました。その中の一つは、「ことば」について 182 ページを費やして書かれた最後の章でくほんとうの「音」は静寂の中にあるのです」という体験です。

松居氏は、その事を、インドのエローラを訪れ、石窟寺院群で体験されました。私も、エローラを二度訪れていますが、そこは、また海外を旅する事ができるなら、もう一度行きたいと思っている場所です。

デカン高原の岩の台地を上から掘って、まるで岩の大寺院を台地から掘り出した感じがするカイラーサナータ寺院や、垂直な崖に掘られた石窟寺院群が並び、仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教の重なりを感じる場所です。

私も、そこで静寂を体験しました。初期の仏教は、自己の救済を追求する思想でしたから、瞑想を目的とするヴィハラー石窟が掘られています。松居氏は、そこで笛の音を聞かれたそうですが、それは、静寂を演出してくれたことでしょう。

かつて、そこで瞑想する僧達に聞こえていた「ことば」は、無音だったのでしょうか。人間にとっての無は、笛の音が指し示しているように「無」だけでは成り立ちません。発せられたことばを自分のものとして聞くためには「無音」と同時に立ち上がる「有音」が必要です。当時、辺りからは静寂と名付けられても、僧達には「釈尊のことば」が獅子吼の大音響ではなかったかと思えます。「エローラ」ということばが贈ってくれた、この本の締めくくりとなる靖かなあたたかさでした。

50 年程前、この地でおとなの読書会を始めてすぐに、子どもの読書の手伝いが出来ないかなと思いました。地域の人とグループになって、大きな風呂敷を持って電車で広島へ本を借りに行く活動から始まりました。そして、形を変え、広がりながら今日に至っています。その間、福音館書店の絵本に随分であいました。

「おもしろくて ためになる」という講談社のキャッチフレーズが有名になり、岩波書店、偕成社など、今も健在な出版社がありますが、反面、至光社、銀河社など小規模の出版社は、

期待できる本の著作権を譲り渡して名前を消していきました。

そういう中であって、福音館書店の絵本は別格のようでした。松居氏のエッセイや絵本、講演は、絵本に目を留める人達の間では、まるで灯台が進路を示すように、導き手の如く語られたものです。

私自身の子ども時代は、まだ戦後の復興が進まず、義務教育終了まで、学校図書館と貸本屋が読み本の供給源でした。小遣いで手に入れるのは、毎月の雑誌位のもので、疎開から帰ってきたのは大人にしか読めぬような漢字がいっぱいの厚い本達です。近所の家でも疎開帰りの本があって、私でも読める本にひかれて、よく遊びに行きました。

「子どもの本」「子どもの読書」などのことばにであったのは、自分の子ども時代をずいぶん離れてからの事です。

おとなになってから、子どもでも読める本の出版が飛躍的に伸びて、おかげで今日まで、長い間、良い思いをしてきました。今回の『絵本・ことばのよろこび』に紹介されている絵本は、ほとんど昔からの“おなじみさん”で、「まだ生きていますよ」とお互いに言い交わすようでした。

松居氏は〈絵本は、子どもに読ませる本ではなく、大人が子どもに読んでやる本〉だと言われています。大人であれ子どもであれ、文字の部分と絵とを同時に見る事は難事ですから、1000年前の宮中のように、女房に絵物語の詞書きをよんでもらい、姫君は聞きながら絵を見るというスタイルが理想的なのかなと思います。(もちろんこの際は自分は姫君の方です!) 詞書きをよんでくれる女房は、ナマリでなければなりません。どこにどんな物語があるかよく知っていて、想像しながら声に出すのが大好きで、姫君最良である事などと条件をつけましょう。(自分が女房の方だったら?...断然がんばります!)

松居氏は〈あなたの中に創り出すことばのよろこび〉と言われます。

誰かに向かってことばを発することが、その人の中によろこびを創ることになればそれは好ましい事だと思います。松居氏がこのように絵本を作られたり、文章を書かれることは、自分の内側から溢れ出たよろこびの贈り物なのかもしれません。でもそれは、松居氏が、経済的にも社会的にも恵まれているからそうできるわけではないでしょう。本というものが持っている無機質的な性格の部分を考えると、本の前に立つとき、その人の生い立ちや環境が本を動かすとは思えません。本に向かい合う人に、本は何も求めないし、また、相手がどうであろうと何も変えません。受け取る人まかせです。

ことばのよろこびは、贈られるものであろうとも、自分の中に創り出さなければ自分にとっての“おいしいことば”にも“輝くことば”にもならないだろうと思います。

ことばは、送り主に由来するのではなく、自分の中で自分用のことばを創り出す受け取り方に由来するものではないでしょうか。共感でも、批判でも、自分を豊かにする受け取り方をしたいだけです。

本を読んで貰うのは、子どもだけにいえることではありません。読書は、一生涯を通じて「聞く読書」をしていることだと考えています。自分ひとりで読んでいるようでも、文章を読み語り(読み聞かせ)してくれているもう1人の自分がいます。これまでの経験を活かして生涯読み語ってくれるもう1人の自分を大事に育てなければと思います。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 YA 】

絵にも、ことばにも いのちというか私達にしっかりとうったえるものがある。

特に、ことばは人そのものであり、絵は人の内面だったり、人の創造的な作品であり、自由が広がる世界だと思う。

又この本を通して、作者の人としての考え方、生き方が底にキリスト教の宗教観がゆったりと流れているのではないかと。

又1951年福音館発行『仏教からキリストへ』の全国の大学を含めて学校への献本の文書伝道を知って、とても驚いた。

絵本に限らず、読物は毎日の生活の一部として、すっかり溶け込んでいる。

◆【 KT 】

「絵本は読ませるのではなく読んでやる本です。」「学校教育を受ける前に人の話を聞く態度をつけておくことが大切。」「おいしいことばをたっぷり食べさせていますか。」など自分がしてこなかった事ばかりで、心の痛い本だった。

たくさんの絵本紹介があり、ゆっくり読んでみたいと思う。

◆【 T 】

「絵本の旅を共に楽しむ」(19P) 素敵な言葉です。読み手の感動が子どもに伝わり、子どもの喜びが読み手に伝わる。二人を包む空間は心地よい、楽しい、幸せな空間になるでしょう。

絵本をあまり読んだことがなかったので、この本の中で勧められていた、『にぐるまひいて』を読んでみました。日々の丁寧な暮らしの中で感じられる充実感・家族の信頼感…こんな生活をしてみたいなと感じました。大人も絵本で感動できます。

◆【 N2 】

久しぶりに絵本に触れました。

子供達に読んでいた頃を思い出しましたが、最近の本のカラフルなこと、大人が読んでも楽しく、大人の絵本ブームが起ったのも納得です。

私も自分の為に絵本を読もうと思います。

◆【 MS 】

20年前、絵本の研修会で、保育士さんが「子供達に読む絵本の基準は？」と質問された。すると講師が「それは選者の品格と感性です。そのためには自分を磨き続けるしかありません」と言われた。当時の私には強烈な言葉だった。その後、絵本だけでなく絵本に関する本を手にするようになり、松居直さんの多くの著書に感銘を受けた。絵本を目の前に

する子どもたちの反応に、松居さんが書いておられた通りの表情だと驚いたものだった。彼は時代が移ろうと、絵本という不思議な世界のなかに秘められている真実や、その力や働きを見出す感性や知性は変わらない。

今回の課題本でも、キリスト教に裏打ちされた日常生活や福音館書店創業者や編集者として学んだ中から、絵本一冊一冊の魅力を様々な観点から選書し、魅力をたっぷり語っている。思わず手元にはない絵本や本を買い求め、読み漁ってしまった。『にぐるまひいて』『エミリー』『もりのなか』などの素晴らしさを再確認し、エッツやモーゼスおばあさんの生き方に敬服した。心は自然と穏やかになり幸せな時間を過ごした。

「選本は、選者の品格と感性」ということばは、私にとってバイブルであり、未来へのことばである。

『絵本・ことばのよろこび』を読んで

◆【 c 】

最近、よく思う。私に必要なものが、絶妙なタイミングでやってくるなあ、と。この本もその一つである。というのも、著者の松居直？う～ん、どこかで聞いたことあるぞ…あっ、『こぶじいさま』！

実を言うと、子育てするまで絵本にはさほど興味はなかった。でも今、4才の娘に読み聞かせているうちに、だんだん絵本がおもしろくなっていた。

それに気がつかせてくれたのは、松居直(著)・赤羽末吉(絵)『こぶじいさま』。鬼が踊って歌う歌がなんだかおもしろく、2人で覚えてしまって、時々口ずさむ。

一くるみは ばっぱ、ばあくづく、
おさなぎ、やあつの、おっかあかあ、
ちやあるるう、すってんがあ、
一ぼこ、二ぼこ、三ぼこ、四ぼこ…

意味はよくわからなくても、適当にリズムにのって歌うと本当に楽しい。絵本って、声に出して読むべきもの、そしてただ読みあげるのではなく、誰かのために読むようにできていて、そうしてはじめて絵本の本領(?)が発揮できるのだ、とその時感じた。絵本を通して、私にそのことを気がつかせてくれたのが、松居氏だったという驚き。松居氏の思うように絵本の世界に導かれたのだと、『絵本・ことばのよろこび』を読んでわかった。

繰り返し、松居氏は言う。語ること、読んで聞かせることの重要性、絵本は読ませようとしたり、教えようとするものではなく、ただ楽しむもの。絵本で喜びを感じた子どもは、その体験を心の奥深く、無意識の領域に取り込む。見えないところで生きていく力になることを、確信を持って語っている。

I, II, IIIと話が進むにつれ、絵本にはすごい力があるのだということがわかる。絵本の世界は、国境も時間も常識も軽々と飛び越えて、自由である。しかしその反面、全体主義的な教育観を植え込む恐ろしいものにもなるのだと語っている。戦後、＜国の将来は子どもの教育にかかっているという思いと、まず読むべき本が欲しいという切なる願い＞のもと、＜質の高い絵本を日本の子どもたちのためにも、自分の手で編集したい＞と、「こどものとも」を発行した、とのこと。

私の絶妙なタイミングは、続いた。ちょうどこの本を読み始めた頃、娘にたくさんの絵本を譲ってもらっていた。昔、その方の娘さんに読んで聞かせたという絵本と、月刊予約絵本「こどものとも」1970年代発行のものである。今、一冊ずつ、楽しみながら読み聞かせている。そして絵本の中には、レオ・レオーニの『フレデリック』もあった。読んだことのなかった私は、すぐに読むことができ、そして、その勢いで図書館の『スイミー』を借り、再度読んだ。絵本の世界の本当の豊かさに気がついていなかったことをつくづく感じた。そしてふり返ってみた。幼い頃、私はどんな絵本を読んできたのか。記憶はほとんどない。覚えているのは、馬場のぼる『11ぴきのねこ』。今も手元にずっとあるのは、ホフマン『ねむりひめ』。これは絵が好きだった(特に最後のページの大きなウェディングケーキを眺めるのが。今は娘に読んで聞かせている)。一見、子ども向けでないような絵をなぜ母が買い与えたのかはわからないが、この本も松居氏が手がけた本だった。

そして1927年創刊の「キンダーブック」は、今、娘が幼稚園から毎月持って帰ってきている。

＜語り、そして聞く関係におけることばの働きと、ことばの力を共に体験することが、単に子どもの成長だけでなく、親の成長により一層大きな力となる＞。

＜絵本を読んでやることは、絵本という喜びに満ちたことばの世界を、おとなが子どもと手をつないで旅をすることです＞。

私は今、その真っ直中、その恩恵を日々受けている。

◆【 YA 】

生後6・7ヶ月ぐらいと記憶しているが、確か「うさこちゃん」シリーズの絵本で、何回も読んできると、原色の鮮やかな赤色のページにくると、手を出して来て触ろうとする仕種をして驚いたことがある。又馬場のぼるの『11ぴきのねことあほうどり』では何回目でも、そのページに来るとのけぞって笑いころげていた姿を思い出す。親は読むだけでいい、何も言わなくても子どもなりに反応をしている。絵本は本当にうまく構成が出来ていると思う。絵の色具合や形から、子どもなりの感性で何かと思い、自分のなかに上手にとり込んでいるのかしらと思う。

少し大きくなり、人のことばが少しでも理解出来るようになると、もう絵からもことばからも二刀流で絵本から喜びや悲しみや楽しさを心で感じ、未知の世界を広げてゆくことにつながる。

ことばが全然無い絵本を見たことがある。ページ毎に切り抜いているところがあり、ページを進めると前ページの動物の顔がピッタリとその切り抜きに現われる。子どもは大喜びするだろうなと思う。

著者が述べているように、絵本から教訓や教育的なことを求めるべきではないと。親が子どもに読み聞かせるだけで十分だと。親子でくっついて本を読んでいる姿は、見ているだけで微笑ましく落ち着く。

又著者は子どもは「ことばは覚えるのではなく食べるのだ」と表現されている。それを心の中で吟味し、やがて血となり肉となると。大人でも言葉が響かないとすぐ忘れる。

著者自身が福音館書店創業に関わり、子どもの時代に本と接することの大切さを自身の経験や人生から強く感じておられるのであろう。

何度も聖書の抜粋が出ていた。少しの期間かじった程度で仲々とっつきにくい。考えてみると、世界中のキリスト教信者のバイブルであるから聖書は特別な読みものに違いない。

著者にとってキリスト教、聖書がどんなに受けとられて影響されたかはよく分からない。

◆【 TK 】

テレビは気配である 若い人の語った言葉ですが、今テレビを聴いて見て、スマホで喋りまくる、メールで絵文字。

この本を読んでいかに気持ちと言葉、生活の力が大切かがよく分かりました。言葉の森に親子で楽しんで遊びに行きましょう!子供を教えるのではなく楽しむのです。そして声を出して読むと心に頭に自然と入ってくるのです。

そして、よく聞く事で精神をも充実させるのです。

絵本は言葉を通して気持ちと文化を伝える事が基本だと松居さんは言います。確かに、感情とか共感、人への気持ちが豊かになり、また文化も広げていける。色々な生活の人がいて色々な考えの人がいる。そして自分の生きる活力にもなるのです。

文字の読めない2歳迄の子供へは特にそう言えます。2歳迄に大人の脳の4分の3迄ができると言われます。心に入れておけば、その後思い出して表現できるようになるというからには、読んでさしあげたい。

ボランティアをされてる方は偉大だと思います。宮沢賢治、花子とアン、渋沢栄一と今迄読んだことや時代もつながって来ています。大人の絵本の会も企画したくなってしまう。

まず言葉と文化を大切に伝えていきたい。

◆【 R子 】

◎私にとって松居直さんとは？

「絵本の神様」と思っています。

松居さんは、福音館書店の創業に尽力し、「こどものとも」を創刊された。河合隼雄、柳田邦男、松居直さんの対談『絵本の力』の中でも松居さんの幼い頃の環境が描かれています。それがいかに大切なことなのかを知ることが出来ました。

「心を動かすよろこびこそが、生きる力となり子どもの成長、発達をうながす」

「子どもは言葉を覚えるのではなく、食べるのだ」ということが『絵本・ことばのよろこび』を読

んで納得できます。

松居直さんは、絵本の“絵”をととても大切にされています。私は日本の昔話『ももたろう』『だいくとおにろく』『こぶじいさま』など、絵を見ただけでお話が進んでいくものが好きです。民話を掘り起こし、ていねいな言葉や絵によって編集された絵本は松居直さんの絵本に対する強い使命感すら感じます。

◎私にとって松居直さんとは

「ことばの神様」

私の先輩教諭に、子どもが発したひとつひとつの言葉をとても大切に扱われている方がおられました。その方は、子どもが驚いた言葉や不思議に思った時に出た言葉を“つぶやき”として集められ、その言葉が発せられた場面を一枚の絵にして学級全体に共有できるような保育をされていました。地道なとりくみでしたが、私は一人ひとりの子どもを大切にされている先生に憧れ、自分も“つぶやき”が集められるよう聴く耳をつけなければと思ったものでした。後になって聴く力とは相手に寄り添って聞くということもわかりました。松居直さんが編集された絵本にはそんなことが詰まっていると思い、松居さんと先輩の先生が重なって見えました。

◎私にとって絵本とは

『何だろう??』と自問自答。いつも部屋のどこかに置いてすぐに手にとって見るもの。近所の子ども達に来て、絵本を見ながら目を輝かせたら「一緒に見る?」と言ってしまい、次第にお母さん達と絵本談義をしてしまう。68歳になっても、こんな思いが続いているのは、30代の頃吉川五百枝先生にお会いし、絵本のもつ魅力、絵本を読み語る楽しさを教えていただいたからだと思っています。今では子ども同士のブックトークは当たり前のように行われていますが、当時の私は“目からうろこ”状態でした。毎日、絵本の読み語りをしているうちに、子ども同士で「この絵本〇〇のところがすごいんよ」と絵本の内容について共有しあうようになり、毎日の貸し出しが始まったものです。読み語りをする大人が心から「絵本が好き」と思うことが、子ども達(我が子を含めて)に伝わり、その輪が大きく広がっていくんだと感動したものです。

◆【 N2 】

我が子が幼かった頃に読み聞かせようと選んだ絵本の中に、なぜか福音館書店の本が多かったような気がします。

本書で語られているように、子どもの時の豊かな絵本体験や読書体験は生きていく時の力になることは間違いないと思います。絵本を何度でも繰り返し読み聞かせるのは、滋養のある食べ物を毎日食べさせるのと同じで、今すぐに成長の結果が出るものではありませんが、後に血となり肉となり子どもは育っていくのでしょ

著者の言葉に「子どもは言葉を覚えるのではなく、食べるのだ」とありますが、私が子どもに本を読み聞かせているときに感じたのが、子どもは本を読んでもらいそれを耳で聞くのではなく身体全体で聞いているようだということでした。

作中「子どもの本が、国家の政策に迎合するときの影響の大きさと効果は計り知れぬものがあります。日本の絵本がヨーロッパのような本としての絵本として育たなかったのは、子どもに何かを教え込むことが絵本の役割であり、偏った教育性、教訓性が重視されたためだと考えられます。そしてその根底には、子どもの自主性を尊重し、子どもの人格を認めるのではなく、型にはめた教育を目指す封建的な考え方と、国家目的のために子どもを教育するという、全体主義的な教育観、子供観があったことは否定できません。わたくしはそういう教育を十九年間、実際に受けて育った人間です。それを批判し通すところに戦後の私の人生はあり、わたくしの仕事のすべてがあるのです。」と著者は書いています。確かに三才までの食味経験が一生を支配するという言葉があるように、乳幼児期の絵本体験が自覚せずともその後の生活に大きく影響すると思います。

言葉を聞く喜びの意味がいかに大きいか、親と子がことばの力を共に体験することは子どもの成長だけでなく、親の成長にもより一層大きな力となります。子どもを育てるという意識は多くの場合、子どもの育ち、子どもが本来持っている育つ力を妨げているのではないかと著者は綴っています。子ども達の育ちについて大切なのは耳からのことばの豊かな体験の積み重ねである、という事はつまり子どもには楽しく本を読み聞かせ、耳からのことばの喜びと楽しみの体験を与えるだけで十分であると言うことに尽きるのでしょう。

しかし私は、子どもは絵本を読んでもらった時に耳だけからことばの喜びを知るのではなく、その時の読み手の雰囲気などからからだ全部でことばの喜びを知るのだと思います。本書を読んで、絵本は子どもだけのものではなく、大人も十分楽しめ心の栄養にもなると再認識しました。この本にも沢山の本が紹介されていますのでもう一度読んでみたいと思います。

◆【 F 】

初めて「読まず嫌い」をしました。
食わず嫌いのように、ろくに手にとりもしないで読むのを止めてしまったわけです。
「難しくて読めなかった」わけでも「生活が忙しくて時間がなかった」わけでも「ちょっと読んだけど、つまらなくて読む気がなくなった～」わけでもありません！

読み進められなくなって、本を横へ置いているうちに、段々と自分の中で本に対する勝手なイメージが膨らんでいって、読まずに反芻ばかりを繰り返しているうちに理解した気になってしまったのです。何も無いところで喉を動かして空気ばかりを吸っているとゲップが出ます。吐き出させて下さい。

皆さんはお気づきになられたでしょうか？

この本の作者は、わかり易く言ってしまえばエリートです。

大学を卒業してすぐに働いた会社で役員を務め、編集側であるにもかかわらず絵本を創り受賞までして、3つの大学で講師を、国際的な団体でも役職を任されているすごい人なんです(うらやましい!!!)。

聖書を理解し自分で得た教訓と同じように使いこなし、いろんな国へ時には家族とともに出かけ、絵本の知識も豊富で、時代(業界)に対する情熱もすごい！対して自分は…となると歩んできた人生に隔たりを感じてしまいます。

本を通じて、コミュニケーションを図ろうとすること。顔の見えない、そして一方通行の、膨大な情報の受信ですから、それを全て受け取って自分のモノであったかのように取り込み、時には自分の方を変えてしまうことは読書で得られる効能を考えると本末転倒ではないでしょうか。本は薬にも、毒にもなり得ます。著者の主張が自分の思っていることと近くても、相手は別の人間だということを意識して距離を置いて読む姿勢が必要だ、と思います。

我が子には絵本を読んであげたい。168ページに書かれていましたが多くの人が価値観としては共有しているのでしょうか、自分もそう思います。

著者は、子供に何かを教えたり、分からせたりするために読んでやるのではなく一緒に絵本が持っている楽しみを分かち合っただけと欲しているといっています。

(《大人が子供に戻るとき(178頁)》)で書かれているように絵本をお芝居の台本のようにして、一家で楽しく演(よ)めたら、それはきっとすごく楽しいに違いありません。

このような読み方(絵本に向き合う姿勢)があるのだと、知識として学べると、たとえ実践する機会がなかったとしても自分が読者としてスキルアップできたと感じます。

つまりやっぱり絵本を読むことは素晴らしいことなのだ！と早合点したり、わたしは絵本を通して子供に教えるような姿勢(こと)をしたことがない(それが、絵本を読み込むこと、絵本の芸術的な技巧に注目したり作者の背景まで気にかけて調べることができなかった、そんな自分に気づかず)ああ！！わたしの読み方は間違っていなかったのだ！！と作者と同化したように満足するのは、本書に対する理解としてジュー分のいくらか？

消費する読み方は時間の空費と等しいでしょう。しかし未だ自分は絵本を、著者のように読み解くことをしたことがありません。

それにそもそも、そのような背景が気になっても調べるやり方が、見当もつかないので、偉くなりようがないのです。あわれあわれ、あわれやなあ。

「ああ。人の口を借りて好き勝手を言わせてもらったので、最後は少し真面目に考えたことを皆様に問いかけて締めとしたいと思います。」

本書は、1995年6月に出版されました。

終戦後物質的豊かさを求め平和な世の中をみんなが作り上げた昭和は終わり、カルト教団

によるテロと大震災によって世紀末が印象付けられた(であろう)年やがて来る新世紀の社会は、そして人間はどこに向かおうとしているのか。多くの人が関心を寄せていたのではないのでしょうか。

当時を知らない平成初期生まれの自分からしても、昨今は、真実味よりも話題性が上位にくるスマホ・SNS 優勢時代のように思われます。

190ページに読者層の話が出てきました。

良い本を作るだけでは駄目で、本を読んでもくれる読者を獲得しなければ出版業を続けていくことはできないという話です。業界の未来、出版人としての想いが語られ国際交流の話も出てくる第Ⅲ章、少し政治色も帯びてるように感じます。宗教や政治は人の好みが大きく表れるものです。今の時代、相手の性格と主張の良し悪しを分けずに自分の好き嫌いで即決する人も少なくないと感じます、本書は今も本当に効能が必要な人の耳に届く、いや目に入るのでしょうか？